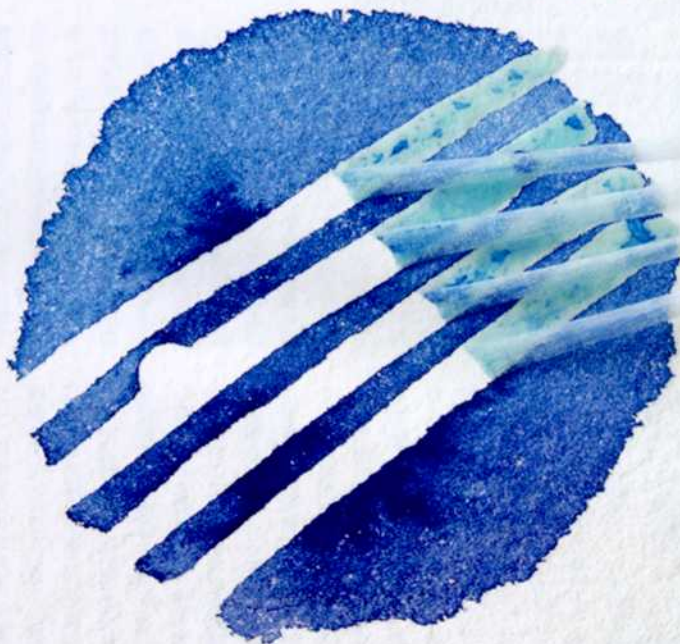


水彩 Technique。

メディウム！



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

＜ホルベイン水彩用メディウムシリーズ＞オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVクロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

松本陽子

色彩の水墨、引き算の絵画
鷹見明彦 文 森田兼次 写真 * 印

1962年、東京・目黒区平町のアトリエにて。東京芸大を卒業した年にモダンアート協会展で大賞を受けて、新進画家として注目された。
(『婦人画報』1962年11月号より 撮影=藤本四八)



1960

「時代は変わったのだから、
どんどん抽象を描くようにと、
小磯先生に励まされました」

作品 1960 キャンバスに油彩
145.5×145.5cm

東京の郊外を八王子からひと駅・高尾へ近づいた駅前には、花粉をたっぷり含む早春の空気に包まれていた。幹線道路の脇を一步入った平屋のドアが開くと、西窓から光の入るアトリエが現れる。両側の壁には、たくさんの大作が裏返しで重ねられている。描き損じた綿布を敷いた床を、新しい模造紙が覆っている。

「子どものころから絵を描くのが大好きで、近所のお絵描き教室に通っていました。都立駒場高校の芸術科から東京芸術大学をめざして、当時の阿佐ヶ谷研究所と国画会研究所で石膏デッサンを学びました」。

指紋が消えるほど指で消したり擦りたりするので木炭デッサンを描いて、1956年、東京芸大に入学。油画専攻の同級生には、新宮晋や大沼映夫、2年上には、高松次郎、中西夏之、篠原有司男などがいた。「小磯(良平)教室でした。小磯先生は、絵を技術面で冷静に客観的

1982

「アクリルは速乾性なので、
その制約によって、
かえって思いきりがよくなりました。」

背景として 1982
キャンバスにアクリル絵具
200×200cm
撮影 = 内田芳孝



に教えてくださって、先生としては
最高に立派な方でした。線には、意
味のある線と意味のない線がある。
うす塗りで、色を濁らせずに透明度
を大切にすること……」。

「当時の芸大には、抽象画を描いて
はいけないという暗黙のきまりがあ
りました。でも、小磯先生は、隠
れてどンドン描きなさい、君は絶
対そのほうが向いている。時代は
変わったのだから」と励ましてくれ
ました。」

《作品》(1960)は、芸大を卒業
した年に初出品したモダンアート
協会展で、大賞を受賞した作品。
日本の美術界にも戦後の抽象画が
根づいて、アンフォルメル絵画が前衛
として盛んに紹介された時代だっ
た。

「66年に東京国立近代美術館で初
めて抽象表現主義絵画を本格的に
紹介する展覧会(現代アメリカ絵画
展)が開かれて、それと同じころに
別のアパートの会場で、サム・フラン
シスの『ホワイト・ペインティング』



ベイルシェバの荒野 1990 キャンバスにアクリル絵具
200×250cm 撮影 = 御澤徹

を観たんです。67年にフルブライト
の奨学金を受けた夫(美術評論家の
藤枝晃雄氏)について、ニューヨークに
行きました。レオ・キャステリ画廊
では、フランク・ステラの分度器絵
画を観ました。ミマル・アートの
全盛で、荒川修作さんや河原温さ
んも活躍していました。」

1年間の滞在だったが、それまで
の方法を全部否定して、ゼロからつ
くり直さないと始まらないと決心
した。

「たまたま訪ねた日本人画家の口



生命体について
2004
キャンバスにアクリル
絵具 182×227cm
写真提供=ヒノギャラ
リー
撮影=末正真礼生

2004 「自分の影が画面の上に落ちるようになったら、制作を止めます」

フトで、初めてアクリル絵具と綿キャンバスを見ました。油絵具は、日本人にはどこか馴じまないとこがあると感じていたので、水で溶くアクリルでなら、自分の根に適った新しい、色彩の水墨画が描けるかもしれないと思いました」。

68年に帰国後、アクリル絵具による制作に取り組んだ。絵具よりも、綿のキャンバス探しが大変でした。アメリカの画材店には数十種類以上あるのに、まだアクリルがデザイナーにしか使われていなかった日本では、帆布を探して代用するしかなかったりだ」。

「一度描くと消せないアクリルは、難しく、言うことを聞かない絵具との格闘の連続でした。材料や表面が気になってしまい、上手くいったと思っても、翌日になって乾いたのを見ると失望したり……。砂浜で砂を積み上げても、即座に波に押し流されるような感覚でした」。

ジェソソで薄く下地をつつくた手

キャンバスを床に置いて、たぶりと水で溶いた絵具を画面上で混色させる。絵具が少し乾いてきたらメデイウムを使って、水を絞った布で拭き取っていく。拭き取ることで綿布の生地目を活かす手法、消すことで生成される「引き算の絵画」は、そのような模索のくり返しから生みだされた。

「かなり大きな作品でも、1日で一気に描ききるようになりました。アクリルは速乾性なので、続けて描き込むことが難しいから、その制約によって、かえって思い切りがよくなりました」。

《背景として》(1982)は、アクリル絵具を使って10年ほどが経ち、ようやく納得できる作品が描けるようになったところの一作。使う絵具は、マゼンタ、セリアアンブルー、バントーンパーの3色のほか数色に限られる。80年代の後半にスランプに陥ったのは、白の使い方が悪くて色が濁ってしまったり、生の紫を使うたせいでした。一度低迷すると、底

まつもと・ようこ 1936年東京都生まれ。60年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。主な個展に61年サウ画展(東京) 65年秋山画展(東京) 74年シロタ画展(東京) 80年現代芸術研究室(東京) 82,88年鎌倉画展(東京) 83年ギャラリー白(大阪) 89年かわさきIBM市民文化ギャラリー(神奈川) 91年「近作展」国立国際美術館(大阪)、村松画展(東京)、92,93,94,97,99,2002年アキライケダギャラリー(名古屋、東京、ニューヨーク、ベルリン) 03年「MプロジェクトVol.3」ASK?(東京) GALLERY TERASHITA(東京) 05年ヒノギャラリー(東京) など。主なグループ展は、60年「第10回モダンアート協会展」(大賞受賞、東京都美術館) 65,74,83年「今日の作家展」(横浜市民ギャラリー、神奈川) 66年「現代の動向」(京都国立近代美術館) 83年「現代日本の美術2」(宮城県美術館) 87年「絵画1977-1987」(国立国際美術館、大阪) 90年「ファルマコン'90」(幕張メッセ、千葉) 94年「戦後日本の前衛美術」(横浜美術館、神奈川) 95年「視ることのアレゴリー」(ゼノン美術館、東京) など。



アトリエの一隅にはベラスケスの《十字架のキリスト像》(プラド美術館蔵)のレプリカが置かれていた *]

西八王子のアトリエにて。日中に限られる制作は、キャンバスを床に置いて行われる。この夏に開催予定の「今日の作家」：西村盛雄・松本陽子」展(6月11日～9月4日 神奈川県立近代美術館 鎌倉)には、1990年から2005年の新作まで35点が展示される *]

の底まで落ちて反動をつけて上がる
ところまで行かないとだめなんです。

《ペイルンシバの荒野》(1990)は、スランプを脱して、バブル期に開催された空前の大展覧会、「ファルマコン」展(幕張メッセ、1990)に出品した連作の一点、多くの旧作は、

旧約聖書の中の地名からタイトルが付けられている。「以前にキリスト教系の学校で教えていたことが

あって、一時期、聖書を読むのが習慣になっていました。聖書に出てくる土地の地図を壁に張って、よく眺めていました。

《生命体について》(2004)は、しばらくの沈黙を破って、発表しはじめた最近作の一点。

「制作は、日中の光があるうちに
行います。(西窓の光で)自分の影が
画面の上に落ちるようになったら、
止めます。ずっと俯いた姿勢で描く
ので、顔が鬱血して、ひどい時は夕
食が食べられないんです。」

画家は、一度離れた油彩にも混色でつくる黒を主体に取り組みつつ
つけている。夏に予定されている美
術館の展覧会には、グリーンによる
新作も姿を現すという。壁に裏返
されて重なる豊饒の面との出会い
に期待を高めて、影がのびる刻限
がきたアトリエを後にした。

3月10日 東京・八王子市千人町の作家
アトリエにて取材

たかみ・あきひ「美術評論家」